

水と光の出会い

——「古典的ヴァルプルギスの夜」に関する考察——

大 杉 洋

1. はじめに

ゲーテの『ファウスト』第2部においては、登場人物が、自然の四大元素(空気・火・土・水)の導きによって活路を見出す場面がたびたび現れる。自然の恵みは、きわめて豊かな言葉づかいで表現されており、時代や社会を超えて読者が共感できるものである。そして、その背後にはゲーテが長年にわたって取り組み続けた自然科学研究の知見が横たわっていることも見逃すことは出来ない。本稿では特に第2幕「古典的ヴァルプルギスの夜」における、水がもたらすさまざまな作用に着目してみたい。

ゲーテの創作においてしばしば見られることであるが、重要なモチーフは、展開される前に先行する場面において、いわば、小出しに提示され、準備される。すでに『ファウスト』第2部冒頭場面において、大気の子アリエルが草原に横たわったファウストを見て、妖精達に向かって発するセリフの中には、水がもたらす癒しのモチーフが見出される。

ARIEL

Erst senkt sein Haupt aufs kühle Polster nieder,
Dann badet ihn im Tau aus Lethes Flut,
Gelenk sind bald die krampfverstarreten Glieder,
Wenn er gestärkt dem Tag entgegen ruht.
Vollbringt der Elfen schönste Pflicht
Gebt ihn zurück dem heiligen Licht. (Z.4628-4633)¹

ア－リエル

まず彼の頭を冷たい枕に下ろし、
それから忘却の河の露で水浴びをさせてあげなさい。
彼が力を回復しつつ翌日に向けて休らえば、

1 テキストは、以下のものを用いた。Goethes Werke. Frankfurter Ausgabe (以下、FAと略記する)。1.Abt. Bd. 7/I. Hg. von Albrecht Schöne. 4. überarbeitete Auflage. Frankfurt am Main 1999.

やがてこわばっていた手足もしなやかになります。
妖精のきわめてすばらしい義務を果たし、
彼を神聖な光へと返してお上げなさい。(4628-4633行)

水と光の出会い。このモチーフは、後述するように「古典的ヴァルプルギスの夜」における水のモチーフのクライマックスを形成するものであるが、アーリエルのセリフにおいてすでに両者に言及されていることを確認できる。

ファウスト伝説において、ギリシア神話絶世の美女ヘレナは欠かすことの出来ないモチーフであるが、第1幕「暗い廊下 (Finstere Galerie)」の場面以降、ファウストはそのヘレナを追い求めてさまようことになる。ファウストはメフィストに渡された魔法の鍵を手し、世界一切が生成する源である「母たち」の国を訪れる。そして、第1幕最終場面「騎士の間」において、「母たち」の国からヘレナとパリスの幻影を伴って地上に戻ったファウストは、かれらを皇帝たちが注目する舞台に連れ出した後、気を失い、倒れてしまう。第2幕冒頭、ファウストはかつての自分の書齋で横たわっている。隣の実験室では、ファウストの弟子ヴァーグナーが(傍らにいたメフィストの魔法の力の助けを借りて)人造人間ホムンクルスの製造に成功する。フラスコの中で生まれたばかりのホムンクルスは、すでに高度の洞察力を備えており²、横たわったファウストの脳裡に浮かぶ情景を描写して次のように言う。

HOMUNKULUS *erstaunt*

Bedeutend! -

Die Phiole entschlüpft aus Wagners Händen,

schwest über Faust und beleuchtet ihn

Schön umgeben! - Klar Gewässer

Im dichten Haine! Frau'n, die sich entkleiden;

Die allerliebsten! - das wird immer besser.

Doch eine läßt sich glänzend unterscheiden,

Aus höchstem Helden-, wohl aus Götterstamme;

Sie setzt den Fuß in das durchsichtige Helle;

Des edlen Körpers holde Lebensflamme

Kühlt sich im schmiegsamen Kristall der Welle. (Z.6903-6910)

ホムンクルス(驚いて)

すばらしい! ——

(フラスコはヴァーグナーの手から抜け出し、

2 S. Dorothea Hölscher Lohmeyer: Natur und Gedächtnis. Reflexionen über die Klassische Walpurgisnacht. In: Aufsätze zu Goethes >Faust II<. Hg. von Werner Keller. Darmstadt 1992. S.93-122, hier S.105.

ファウストの頭上を漂い、ファウストを照らす)

美しい光景だ！ 澄んだ川が

深い森を流れる！ 女たちが衣を脱いでいる、
とても美しい女たちだ！ 光景はますます美しくなっていく。
だが一人の女が輝きを放ってぬきんでている。
たいそう高貴な英雄か、おそらくは神々の家系だろう。
彼女は足を透明な水に浸し、
高貴な身体の優美な生命の火照りを
しなやかな波の水晶のような輝きの中で冷やしている。(6903-6910行)

ファウストの脳裡に浮かぶのは、水場で戯れるギリシア神話の美女たち。そして、ひときわぬきんでている女とは女王レーダーである。やがてレーダーの前には白鳥の姿をしたゼウスが現れる。すなわち、この情景はヘレナ誕生のいきさつを暗示している。のみならず、ここでも水と光の輝きが鮮やかに描かれていることを見逃すことはできない。「水と光」のモチーフは第2部冒頭から通奏低音のように要所要所で現れていることがわかる。

ファウストの胸中を窺い知ったメフィストは、古代ギリシアのペネイオス川へ旅立つことを提案し、「古典的ヴァルプルギスの夜」の場面へと続く。この場面におけるギリシア神話の世界は、オリジナルのそれとはさまざまな点で様相が異なる。そこには少なくとも二つの側面が見出されるだろう。ひとつは、古き良き太古のギリシア、近代ヨーロッパ人が模範し学ぶべき憧れの対象としてのギリシアである。もうひとつはゲーテが生きた近代ヨーロッパにおける思想、問題意識、価値観が投影される場としてのギリシアである。ギリシア神話の衣を借りて、ゲーテの同時代の諸相が顔を出すのだ。そのなかには当時の自然科学の知見も垣間見られる。

2. 「古典的ヴァルプルギスの夜」における「水」のモチーフ

さて、ギリシア神話の世界に旅立ったファウスト、メフィスト、ホムンクルスは、それぞれ求めるものを追いかけて、三者三様の道のりを歩むこととなる。ヘレナを探し求めるファウストの途上においては水の作用が極めて生き生きと描かれている。川のせせらぎと生い茂る植物のざわめきが交錯する。水が生命体にとって不可欠な自然元素であるにとどまらず、その聴覚上の作用もまた、いわば自然界の音楽として聞くものに癒しをもたらすのである。

FAUST an den Fluß tretend

Hör' ich recht, so muß ich glauben:
Hinter den verschränkten Lauben
Dieser Zweige, dieser Stauden
Tönt ein menschenähnlichs Lauten:

Scheint die Welle doch ein Schwätzen,
Lüftlein wie - ein Scherzergetzen. (Z.7257-7262)

ファウスト (河に足を踏み入れながら)
私の耳に間違いがなければ、信じるしかない。
絡み合った木の葉や、
枝や木々の背後では、
人間の声に似た音が鳴り響いている。
波の音はおしゃべりのようだ、
風のそよぎも戯れを楽しんでいるかのようだ。(7257-7262行)

ファウストは、植物が茂る背後に、また、波に、人間の声に似かよった音声を聞き取る³。
登場人物を取り巻く自然が、人間と調和した一体感をここでは見出すことができる。

ところで、ファウストが、自然の癒しの作用で息を吹き返すことは、繰り返しあるのであるが、にもかかわらず、ファウストが、それを意に介しないような発言をしている箇所がある。

FAUST

Geheilt will ich nicht sein, mein Sinn ist mächtig;
Da wär' ich ja wie andre niederträchtig. (Z.7459-7460)

ファウスト
私は癒されるつもりなどない、私の志は強いのだ。
癒されなどしたら、他の者たち同様下劣な人間になってしまう。(7459-7460行)

この発言には、ファウストの固い意志が表現されている。そして、この固い意志があればこそ、ファウストは自分の求める理想を追いかけ続けることができたのだ、と肯定的に読むことができるだろう。しかし一方で、ここでは、自然の恩寵を意に介しない、という近代ヨーロッパ人の一面が暗示されている、と解釈することもできるのではないだろうか。後述するように、「古典的ヴァルプルギスの夜」で描かれる自然と人間の関係は、理想的な調和、というひとつことでは片付けられないものである。

さて、ホムンクルスが、自らが生成するすべを求める途上においても、「水」ないしは「湿り気(Feuchte)」の賛美が随所に見出される。感心させられるのは、ホムンクルスは、自分たちがたどり着いたエーゲ海域の事情をきちんとわきまえていることである。アルプスの北方とは勝手が違うことを嘆くメフィストに向かって彼は言う。

3 Vgl. Dorothea Hölscher Lohmeyer: Natur und Gedächtnis, S.110ff.

HOMUNKULUS

Nordwestlich, Satan, ist dein Lustrevier;
Südostlich diesmal aber segeln wir -
An großer Fläche fließt Peneios frei,
Umbuscht, umbaumt, in still- und feuchten Buchten,
Die Ebne dehnt sich zu der Berge Schluchten, -
Und oben liegt Pharsalus, alt und neu. (Z.6950-6955)

ホムンクルス

悪魔のあなたには北西がお気に入りなのでしょうが、
今回私たちが帆走するのは南東の方角です。
広々とした平野をペネイオス河が意のままに流れます、
茂みや、樹木に囲まれ、静かな、湿り気を帯びた入り江の中を。
野は山の奥深くまで伸びています。
そして上方には古くて新しいファルサロスの町があります。(6950-6955行)

ここで言及されている「湿り気」のモチーフは、「水と光」のモチーフがクライマックスに達する場面に至るまでくりかえし現れる⁴。

さて、「古典的ヴァルプルギスの夜」におけるタレスとアナクサゴラスの言い争いは、ゲーテ時代における「水成論」と「火成論」の論争を背景としたものである。ここでタレスは、水の持つしなやかさ、流動性に言及しつつ、水が火山活動の産物である岩とは袂を分かつものであることを述べている。

Thales.

Die Welle beugt sich jedem Winde gern,
Doch hält sie sich vom schroffen Felsen fern. (Z.7853-7854)

タレス

波はいかなる風にも喜んで従う、
が、切り立つ岩は避けて通る。(7853-7854行)

タレスは、また、水、ないしは湿り気が一切が生まれる源であることを讃えて言っている。

4 この「湿り気」のモチーフは、ゲーテ植物学の領域では、根が張る大地に関して言及されている(WA-II, Bd.7, S.282f.)。S. Uwe Pörksen: „Alles ist Blatt“. Über Reichweite und Grenzen der naturwissenschaftlichen Sprache und Darstellungsmodelle GOETHEs. In: Ders.: Wissenschaftssprache und Sprachkritik. Untersuchungen zu Geschichte und Gegenwart. Tübingen 1994, S.109ff.

Thales.

Im Feuchten ist Lebendiges erstanden. (Z.7856)

タレス

湿り気の中で生きものは生まれたのだ。(7856行)⁵

さて、「岩に囲まれたエーゲ海の入り江」において、年に一度、海神ネレウスに会うために、ガラテアがホタテの舟に乗って美しい姿を現す場面では、生命を生みだす水の美しさが際立って表現されている。ここで、タレスは言葉を尽くして水を賛美する。

THALES

Heill heill aufs neue!

Wie ich mich blühend freue,

Vom Schönen, Wahren durchdrungen...

Alles ist aus dem Wasser entsprungen!!

Alles wird durch das Wasser erhalten!

Ozean, gönn uns dein ewiges Walten.

Wenn du nicht Wolken sendetest,

Nicht reiche Bäche spendetest,

Hin und her nicht Flüsse wendetest,

Die Ströme nicht vollendetest:

Was wären Gebirge, was Ebenen und Welt?

Du bist's, der das frischeste Leben erhält. (Z.8432-8443)

タレス

幸あれ！ 幸あれ！ 今一度繰り返そう！

美しきもの、真なるものに満たされて、

私は途方もなく喜んでいる。

一切は水から生じたのだ！！

一切は水によって保たれるのだ。

5 この箇所には、ゲーテが長年取り組んできた自然科学研究における重大な関心事が提示されている。ゲーテは、『形態学論考』の「内容の紹介」において、ヘルダーを引きあいに出しながら、以下のように言っている。「ヘルダーが『人間の歴史に関する考察』の執筆を企てたおかげで、私の困難で苦勞の多い研究は容易となり、楽しいものにさえなった。私たちが日々話し合ったのは、水と大地から成る世界の原初、そして、その後、太古以来発達してきた、さまざまな有機的な生物のことだった。」(FA. I. Abt. Bd.24, S.405)

海よ、お前の永遠のはたらきを我々に恵んでおくれ。
お前が雲を送ってくれなければ、
川を豊かに潤すことがなければ、
あちらこちらへ川を流してくれなければ、
流れを完結することがなければ、
山々、平野、そして世界はどうなるだろう？
お前こそが、きわめてみずみずしい生命を支えてくれるのだ！（8432-8443行）

「古典的ヴァルプルギスの夜」においてはギリシア神話に由来するさまざまな神々、生物や人物が登場する。そのなかで、セイレーンは、鳥の胴体をした女性で、その歌声で船乗りたちを誘惑した。その彼女たちも、水のもたらす恵みを賛美している。

SIRENEN

Stürzt euch in Peneios' Flut!
Plätschernd ziemt es da zu schwimmen,
Lied um Lieder anzustimmen,
Dem unseligen Volk zugut.
Ohne Wasser ist kein Heil!
Führen wir mit heilem Heere
Eilig zum Ägäischen Meere,
Würd' uns jede Lust zu Teil. (Z.7495-7502)

セイレーンたち
ペネイオスの流れに身を投じなさい！
水音高く泳ぐのがよいのです。
歌に歌を重ねましょう。
不幸な人たちも元気になります。
水がなければ幸せはないのです！
健やかなものたちの群とともに
エーゲ海へ急いで行けば、
どんな喜びも授けられるでしょう。(7495-7502行)

セイレーンたちは歌い、笛を吹いている (BA vor V.8034)。この場面においても、水の奏でる音を含め、作品が備えている音楽性が注目に値する。⁶

6 2000年から2001年にかけてベルリンで行われた、ペーター・シュタイン演出の『ファウスト』上演においては、波の合成音を交えながら音楽が効果的に使われていた。

ところで、人造人間ホムンクルスは、目下自分が製造されたガラス製のフラスコから出ることができない。生命体はいかなるものであれ、外界から自身の内部を守る覆い (Hülle) を必要とする、というのが、ゲーテ形態学の知見だが (FA. 1.Abt. Bd. 24, S.395)、ホムンクルスにとっては、その覆いがガラスなのである。したがって、ホムンクルスが生命体として完成されるためには、自分が発することのできる炎でいったんガラスを破り、自然界の生成のプロセスに身を委ねなければならない。ホムンクルスは、その生成のプロセスをどこで始めようか、と模索している。そして変身の神プロテウスは、海の波の作用を賛美し、ホムンクルスに海へ身を投じることを促すのである。

PROTEUS

Das Erdetreiben, wie's auch sei,
Ist immer doch nur Plackerei;
Dem Leben frommt die Welle besser;
Dich trägt ins ewige Gewässer
Proteus-Delphin.

er verwandelt sich

Schon ist's getan!

Da soll es dir zum schönsten glücken:
Ich nehme dich auf meinen Rücken,
Vermähle dich dem Ozean. (Z.8313-8320)

プロテウス

地上の営みは、どんなものであれ、
いつも辛いことばかりだ。
生命には波の方が役に立ってくれる。
お前を永遠の海へと運んでやるよ、
プロテウスがイルカになって。

(変身する)

もう大丈夫だ！

そこでは何もかもうまくいくことだろう。
私がお前を背に乗せて
海と結婚させてやろう。(8313-8320行)

ホムンクルスが、ついに自分が生成を開始する場を見出したのは、先述した、ガラテアがホタテ貝の舟に乗って登場した場面であった。ガラテアの妙なる美しさに魅了されて、ホムンクルスは語る。

HOMUNKULUS

In dieser holden Feuchte
Was ich auch hier beleuchte,
Ist alles reizend schön. (Z.8458-8460)

ホムンクルス

この穏やかな湿り気の中では、
私が何を光で照らし出そうとも、
全ては魅力的で美しい。(8458-8460行)

ホムンクルスのこのセリフにおいては、「湿り気(Feuchte)」と「光を照らす(beleuchte)」がきれいに脚韻を踏んでいる。本稿で取り上げた水と光の出会いのモチーフ。そのクライマックスをこのセリフに見出すことができる。

「古典的ヴァルプルギスの夜」における「水」の賛美は枚挙にいとまがない。そして登場人物達にもたらされる水の恩恵も随所に見られる。そこには自然と人間の調和が理想的に描かれているように思われる。が、一方で、自然の側からの手厳しい人間批判、ひいては文明批判も見逃すことはできない。海神ネレウスは次のように言っている。

NEREUS

Was Rat? hat Rat bei Menschen je gegolten?
Ein kluges Wort erstarrt im harten Ohr.
So oft auch Tat sich grimmig selbst gescholten,
Bleibt doch das Volk selbstwillig wie zuvor. (Z.8106-8109)

ネレウス

忠告だと？ 忠告が人間どもに効いた試しがあるか？
英知の言葉もこわばった耳の中では固まってしまう。
幾たびとなく行いがきびしく非難されても、
連中は相変わらずわがまま勝手なままさ。(8106-8109行)

そして変身の神プロテウスは、生成を願うホムンクルスに向かって、人間になろうとすることを戒める⁷。

7 ゲーテ自身、1829年12月16日付のエッカーマンとの対話で、ホムンクルスが「すっかり人間になってしまふことによって、よどんだり、偏狭になったりしていない」ことを肯定的に語っている。S. Katharina Mommsen: Homunkulus' Weg zum naturhaften Sein. In: Dies.: Natur- und Fabelreich in Faust II. Berlin 1968. S.168-182, hier S.168ff.

PROTEUS

Komm geistig mit in feuchte Weite,
Da lebst du gleich in Läng' und Breite,
Beliebig regest du dich hier;
Nur strebe nicht nach höheren Orden,
Denn bist du erst ein Mensch geworden,
Dann ist es völlig aus mit dir. (Z.8327-8332)

プロテウス

霊のまま広い水の世界において、
すぐに縦横不自由なく暮らせるよ、
ここでお前は好きなように動くことができる。
だが、高い序列を求めるのはおよし、
というのも、人間になってしまったら、
お前さんもおしまいだからね。(8327-8332行)

ホームクルスに提案されるのは、生成の初期の段階から始めることである。それは単細胞アメーバからなのか、小さな魚なのか、具体的には言及されていないが、「魚」のモチーフがこの場面で繰り返し登場することは、このことと密接に関わっていると言えるだろう。

3. おわりに

「古典的ヴァルプルギスの夜」では、水のさまざまな特性や作用が、要所要所で美しい階音を奏でる韻文で表現されている。そこには自然と人間のあいだに実現されるべき調和が、理想像として垣間見ることが出来るだろう。一方で、自然の側からの人間文明に対する手厳しい批判には、ゲーテが今後の人類に向けたメッセージを読み取ることができないだろうか。プロテウスの「人間になってしまったら、おまえさんもおしまいだからね」というセリフ。今日世界で日々起こっている出来事を見聞きするにつけ、このセリフはますます重みを増してきているように思われる。自然の恩寵と、自然が人間に対して発し続ける警告。「古典的ヴァルプルギス」においては、この両者が、永遠に寄せては返す波のように私たちに語りかけているのである。